

小式部内侍が大江山の歌の事

和泉式部、保昌断定・連用が妻ラ四「下る」にて丹後に連用下り過去・連体ける

和泉式部が、
保昌の妻として
丹後に行った

ほラ変「あり」どに、京に連用歌合過去・連体ありけるに、小式部内侍、
時に、
京都で歌合が
あったが、
小式部内侍が、

歌よみにラ四「取る」とら未然れて受身・連用よみマ四「よむ」ける連用を、定頼の中納言、
歌よみに
選ばれて
歌をよむことになったのを、
定頼の中納言が、

たはぶれに小式部内侍に、「丹後へサ四「つかはす」つかはし連用ける過去・連体」
からかつて
小式部の内侍に、
「丹後へ
遣いに出した

人はラ四「参る」参り連用に完了・連用たり完了・終止や。「とラ下二「言ひ入る」言ひ入れ連用て、局の前を
召使いは
もうこちらに参上したでしょうか。」と
声をかけて、
局の前を

をガ上二「過ぐ」過ぎ未然られ尊敬・連用ける過去・連体を、小式部内侍、御簾よりなかば
通り過ぎなざったところ、
小式部内侍が、
御簾から
体半分

ダ下二「出づ」
連用

出で て、直衣の袖を ひかへ て、
(定頼の中納言の) 直衣の袖を つかんで、
出して、

ハ下二「ひかふ」
連用

ク「遠し」
已然

大江山 いくの の 道の 遠けれ ば
大江山、 生野に行くまでの 道が 遠いので

マ上二「見る」

未然 打消・終止

まだ ふみ も み ず 天橋立
まだ大江山までは訪れていませんし、(母からの) 手紙も見ていません。

カ下二「よみかく」

連用

過去・終止

ハ四「思ふ」
未然

打消・連用

シク「あさまし」
連用

と よみかけ けり。 思は ず に あさましく て、
(中納言に) よみかけた。 (中納言は) 思いがけず 驚きあきれて、

ハ四「言ふ」
連用

「こ は いか。に。」と ばかり 言ひ て、
「これは一体どういふことか。」と だけ 言って、

バ四「及ぶ」

未然

打消・連用

タ四「ひきはなつ」
連用

返し にも 及ば ず、袖を ひきはなち て
(その歌に) 返すこともできず、(つかまれた) 袖を引き離して、

ガ下「逃ぐ」

完了・連用

未然

尊敬・連用

過去・終止

逃げ

られ

に

けり。

お逃げになった。

カ変「出で来」

過去・終止

連用

完了・連用

小式部、これより

歌よみ

の

世おぼえ

出で来

に

けり。

小式部は、この一件から

歌よみの

世間での評判が

できた。